

醞

酤

入

櫻

酩酊
の
櫻
水上勉

新潮社

醍醐の櫻

(だいのさくら)

一九九四年一月二五日発行
一九九四年二月二〇日二刷

著者 水上勉 みずかみ つとむ

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一 千一六二
電話(営業部) 〇三―三三二六六―五一一
(編集部) 〇三―三三二六六―五四一一
振替 東京四―八〇八

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 加藤製本株式会社

価格は函に表示してあります。

© Tsutomu Mizukami 1994, Printed in Japan
乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-321120-2 C0093

目次

この冬

7

螢

39

鼠捕り

67

高瀬川・春

83

その春に

111

茄子の花

135

醍醐の櫻

157

題字 水上勉

装画 平松礼二

装幀 新潮社装幀室

醍醐の櫻

この冬

冬のはじめに、ぼくは播磨の三田の町を歩いていた。ここは古い城下町である。武家屋敷跡が高台にあって、そこへゆく坂道や土塀の古ぼけたたたずまいがよかった。三、四段自然石を積みあげて、その上に生垣をあしらった屋敷が、似たような規模の二階家や平家の瓦屋根を、丈高い庭樹にしづめている。鉄錨てつびょうのついた門扉を昔のままつかっている家もある。土塀から道へ蜜柑の枝がこぼれていたり、生垣に白玉椿が小ぶりの花を咲かせていたりした。寒い日だったが、ときどき陽ざしがのぞくとかわいた石の道が浮きたつので閑雅な気分であった。

三田ははじめてだった。用件は、武家屋敷から山の方に行った先の寺へ墓参に

来たのだ。この町の出身で、政財界に活躍されていたS氏が、去年八十三歳で亡くなった。毎年夏に軽井沢で仕事をするぼくは家が近所でもあったので懇ろにしていた。文壇人ともつきあいの多かった方だが故人の遺志で葬式はなく、都内のホテルで盛大な追悼会があつて、案内をうけたが、ぼくは運わるく、京都の病院に入院中だったので、欠席した。そのことが氣になっていたのと、先頃、S氏の遺骨がこの町の菩提寺に納められた、ときいたので、持病のリューマチがあいかわらず痛んで左手も腫れていたが、朝から天気もよかったのでひとりぶりとやってきた。風は少しあつたけれど、うららかな陽ざしは、ぼくの孤独な墓参にふさわしく思えた。避暑客であふれる高原町の騒々しさがしずまる秋近い頃、よくぼくは落葉松の下道でS氏にあつたものだ。S氏は高齢に似あわない背すじののびた上半身をそらせて、親しげに話しかけてくれた。若狭の百姓出身の物書きのぼくには、政財界の長老はどこかにが手に思えるのだったけれど、S氏とは不思議に心のかよう話ができた。若狭と播磨は信州から見ると同じ西の国だ。同じ方角の空で生まれたというよしみがそうさせたのかもしれない。ときどき、S氏

は播磨の地酒をぼくの留守のうちへとどけてくださったりした。どっちかという
と、ふたりだけのひそかな交友だった。そんなことも、このたびのひとりきりの
墓参を思いたたせ、それがふさわしく思えたのである。寺は曹洞宗の月心寺とい
い、三田の殿様だった九鬼家の菩提寺で、S氏は家老の家柄だったため、墓地も
ひろくてびっくりした。雑木の茂った寺裏の台地に石垣をめぐらせた九鬼家の墓
は、庵でも建ちそうなほどの広い敷地で、苔むした高い墓石がいくつもならんで
いたし、S氏の墓地も相当にひろくて、藩政時代の殿様や家老の豪勢さが偲ばれ
た。S氏は遺言で、「葬式もするな、戒名もつくるな」と奥さまにいわれたそう
で、墓へ行ってみると、歴代のS家の墓石がならんだ端に、真新しい土もりが一
つあるきりで、十センチ角ほどの木杭を一本立てただけが墓だった。頑固な無宗
教派で通したS氏の孤独な生涯が思われた。白や黄の菊が青竹の長筒に枯れてい
たのを、町で買ってきた花にさしかえ、土の上に一束の線香をたてて煙をくゆら
せ、その煙の中でぼくは合掌してから墓地を出た。武家屋敷を歩いて、町の盛場
へ降りた頃は、まだ、線香の煙が、広い木立ちの梢にゆらいでいたかもしれぬ。

腹もへっていたからそば屋か、らーめん屋があればとさがしたのである。武家屋敷を降りると、町の様相はありふれた看板の多い商店街に変わっていった。そこへゆくのもなるべく古い町筋の小路を歩いたが、繁華街に近い一角にきたとき土塀をめぐらせた小さな町寺まちでらがある。小ぶりの門のわきに、「三好達治幼少時住居」とさつき月心寺で見たS氏の墓標ぐらいの木杭が立っている。足をとめ、門内をうかがってみた。そこは裏門のようで、正門は反対側の道路角にある様子であるが、裏門なので、庫裡と勝手口の平家の別棟に近い。葉の落ちた樹木と、もちや八つ手のわずかな茂みが裏戸口にのぞいている。よごれたカーテンのかかった窓が一つ。人影はなかった。ぼくは「測量船」に酩酊した青年期をもっている。ああ、ここか、と一瞬、背すじののびる思いがした。三好達治氏は大阪生れときいていた。三田で幼少時をすごされたことがここにきてあらためてわかった。門の中まで足を入れ、無人の裏庭をのぞいた。人に見つかれば怪しまれるほど庫裡は接近しているので、長時間そこにいるのは気がひけた。それで、塀ぞいに正門の方へまわって、寺の本堂の正面にゆき、町寺のありふれた姿にしばらく見入っ

たのである。近所はごみごみした町屋である。どこも軒がひくくて、裏町とよぶにふさわしかった。人通りもなかった。三好氏の晩年の顔がうかんだ。

あれはぼくの生まれた福井県の北端に近い三国での写真だった。和服の三好氏は机上に筆を走らせておられた。屈託の面持ちだった。ひどく痩せておられる。戦争中のことだ。もうそろそろ敗け戦さの色が濃かった。ぼくは同じ福井県でも南端の若狭富士とよばれる青葉山中腹にある分教場で助教をしていた。そこへ三好さんの弟子すじにあたる女流詩人がよくあそびにきた。彼女は、三国で貸本屋をひらいていたが、若狭の小浜出身だった。ぼくのところへくるのは、三好氏の食糧確保のために、当時のことから、米は手に入りにくくて、芋や野菜さえ貴重だった。ぼくは、高名な詩人が三国へ疎開して不自由をしのいでおられるときいて、母にたのんで、一、二升の白米を融通してもらった。そんな時、女流詩人から三好氏の頑固な日常のくらしぶりについて興味ぶかくきいたものだった。そんなことをいま、思いだしたのだ。もちろん、三好氏は冥界におられる。あの頃、つまり昭和十九年の夏から冬にかけて、若狭からとどいたわずかな白米が、ぼく

の母の小作して手に入れたものだったことなど、三好氏はご存じなかったろう。それはそれでかまわないのだけれど、ぼくにいま、その何でもない戦争末期の冬の日々がよみがえったのだ。「測量船」を読んで感動したのも、たぶんそのお弟子さんから、創元選書で出ていた一冊をめぐまれたのかもしれない。へあはれ花びらながれ／をみなごに花びらながれ／をみなごしめやかに語らひあゆみ／うららかの跽音空にながれ／をりふしに瞳をあげて／翳りなきみ寺の春をすぎゆくなり／み寺の薨みどりにうるほひ／廂々に／風鐸のすがたしづかなれば／ひとりなる／わが身の影をあゆまする蹠いじのうへ／まちがつているかもしれない。たぶんこんなうつくしい文句だったと思う。それから、〈雪〉という詩だった。太郎の家にも、次郎の家にも雪ふりつもうたつておられた。〈少年〉というのもあった。

夕ぐれ

とある精舎の門から

美しい少年が帰つてくる